

新
の
山
花
中

^ 13
2900
2



門へ 13
2909
巻 2

風情 魚初編卷之中

東都

松亭金水編次

昭和九年
七月五日
照本

第二回

四方八百里の武藏野と。かの義貞が陣どりて。
つとめくも書くを。月も草より草に。廣
野も今の繁榮の。三國無双の大都會。屋建
るり金敷楼閣斜ふそびえ月に映下日に輝
かえ。切りの草の救ふも。あけき家居よ群

己魚カシヤ

集あつまる人ひとへ途とちこころせう小せう似にく。誰たれとらるべき
土地とちもろく。新道しんみち小路せうぢう八街はちまちよ。九又くや二間にまの
祀家うやまを人ひとの住すまざる方かたもる。什麼なニの所ところ
ハ浅草あさくさ也。何なん也良所らうじよの裡うち長ながを日ひあるこの門かど
に徨さまよずして。向むかひの裡うちとさうのぞ一ひとおひいの
わつこさん。今朝けさいてぶらもと寒さむいねこれを
暑あつくとろろけが。モウなむやみひもん日ひ
向むかひかりにあらちやアまままらね。毎まい年ねんのり

どけども暑あつくらちの油あぶら一ひとく急下さ寒さむくあつて
開ひらくらいらでも間まにあらずと。それでもあつて
まえの所ところもちやアとく持もつまるらうら。ほんに
お仕合しあせど。コレアグラうちるえぞ成ておえる
せんゆんぶも何なにとあつはれ歩みす。八や合あつたん
にけりり申まさるまもいつが大かと例れいのさり
けりの志しとあつく。誰たれもありてハあつたこと
しもらうまらう寐ねえずらう。路ち次じと放まも

さあをりおろるゑんぶが。よいと目めが堂だうと所ところが。
 ぢふうちのよ声こゑごうら。モヤけるうと勢いきりうと
 門かどにどちけく笑わらと按おしのどくぢらちりおろく
 コア一ひとが名なと。コライこくくとよぶぶぢる。げがたの
 目めの。そまうまううゆゆからうとめうてでぢぢがサア
 猛まぐぐわわと。そままううてても夜中よちゆうまませせくももおおう
 まねくく氣きの毒どくどどけけどもも大おほままととぢぢた
 ちち一ひとてて猛まと情じやうが。ママおおめめさんさんままてておおええる

其その実まことのこゝろがまままと跡月あとづきの宿賃しゆくぢんもまららねね
 んんぢぢうう。大おほままがま面つらつつたたといいふふののいいま
 其その間ま魔まままがま赫まろ香かうと堂だううう。平家へいけ壁かべがまららや
 みみととちちととままううるる既折きせきおおままららがまるるねねくく怖こゝへへ良よ
 として。よよううくくおおめめのの所ところトトママ。よよるる夜中よちゆうけけらら
 てて来きちちヤヤ勢いきりたたおおままと。おおめめへへとと家主けしゆととるる
 ごとごとままううくくおおるる木戸きどををええトトママねねへへちちとと氣きと
 つつひひるる其その人ひと店賃てんぢんいろいろくくよよ納めなまおおままと。おおままののててままと

ゐるうら。雪隠へも定式小屎へまき。節分
 残の五千や六十。割り入せず。さうと。そのやア
 番ごとなき起されとたまるぬうと。そのやア
 モウ。つけくといひまーを。何もかも初つておな
 えるおめ入るえのるごう。お徳く中スエのまが。
 そまふつけてもうちの冊ごふ。とねもつづく
 いひまんのさ。おめ入の根生が約になくお入を
 ゐるた。大屋まえにもい汚きくいとねるし。まこ

お長屋の衆も。みえる給心も引かけくおな
 えるのふ。押が内ぢうりまご給ふもあひはら
 ね。飲と酒もちうとやめて内のおまぐでも
 あません。のえごまにまうて。あうく申すのみが
 能でもあめ入といひまーう。おまごうて男の
 子ごう。一寸の虫ふも五分のたまをえとやうて。
 子簡が。あうア。まご大屋めが店ちえのるまを云
 ぬ。さたのちまぬる子簡ちげ入といひめんと申が

かうる者に店せめて。満足小借貸せしむ
ともしむ。怖しやアと。免のいづる。傍
いとまなく。せしむ。い畜生。ま
そふく小登。と。いづら。けい。班。め。さ
がほつ。ぎ。ち。び。サ。シ。ン。ぐ。ね。せ
そふく。あり。ま。せ。え。う。ま。男。い。え。な。ま。え。み
で。ま。い。ま。ん。ヨ。ア。の。内。も。あ。り
そんるさ。そま。でも。酒。飲。け。わ。く。の。お。も。い。ひ。び。

また。ア。そ。ま。い。あ。い。と。桑。の。長。金。の。と。渡。る。え
が。ま。ま。に。住。つ。あ。る。ま。い。と。人。紙。と。本
ま。い。と。羨。い。人。の。何。人。の。思。ふ。知。つ。ね
が。何。も。も。と。る。ど。工。面。づ。い。と。う。を。考。え。び
小。形。の。ち。び。ま。ん。が。男。も。う。形。も。う。い
人。せ。人。あ。り。ま。さ。ア。ね。い。く。お。も。や。あ。ま
こ。あ。ま。さ。ち。び。人。ま。ま。い。何。れ。も。も。い
服。屋。で。この。浅。草。も。や。ア。ち。の。金。持。を

ねんといふらん入りのせ一やとゆう入り
 できまうまじふして隠居をえの松ざまへ
 所へ引越して来ころうねへそふさそりやと
 以て交り方知るねんが。全体ろく人の商人がまじふ
 也。志しやと申す画者と申すにる積りごそり
 そまを大かこ別ふちをたえごころうがろ人
 んぞのねんえにる人るえぞの楽るのんさ
 ねんトねん半へくくと下話の音して一人の

女児おんな「まおをえん。今ねんいまのねんねん寒さむいねんねんあつた。あつた
 おのおの就昔ゆふ吉きちよ住すまころ。今住いまて来きえんねんす。そり
 まくおのへりめ前へと申すて申すつら。おのねんねんあつた。
 ころやアよろおのりおのり。おのちやえんねんあつた。おの
 ぶらう私のねんねんあつた。おのちやえんねんあつた。おのちやえんねんあつた。
 男おとことて海岸かいがんのおのまえの所ところで申すこの内うちへおの
 へるあつた男おとこよ。あつたやア。おのちやえんねんあつた。おのちやえんねんあつた。
 おでえんねんあつた。おのちやえんねんあつた。おのちやえんねんあつた。おのちやえんねんあつた。

元興のり



かくも志^{こころ}を晴^{はら}む時^{とき}ある病^{やまひ}の床^{とこ}は透^す間の
 風^{かぜ}もいさか身^みの後^{あと}て庭^{にわ}へも出^でたれそあ人^{ひと}いとも近^{ちか}
 々^々と^とあひ方^{かた}里^りは隔^{へだ}アそ日^ひふ歎^{なげ}きあま^ます境^{かぎ}を
 り^りぢち^{ぢち}ある袖^{そで}の雨^{あめ}さる降^ふまそ^そ啣^{くは}ま^まて^てま^まら^ら
 め世^よと恨^{うら}み^みら^ら再^{また}説^ま月^{つき}日^ひの^のさ^さら^らか^かさ^さく^く一^{いつ}雨^{あめ}月^{つき}と過^す
 しま^{しま}る^る木^きの葉^はち^ちり^りま^ま秋^{あき}も^もさ^さら^らま^まく^くれ^れ不^ふ深^{ふか}の^の庭^{にわ}
 の面^{おもて}折^おち^ちり^り息^{いき}よ^よ茶^{ちや}山^{さん}花^{はな}の^のこ^こ垣^{かき}は^は盛^{さか}りの^のと^とア^アす^する^る日^ひ
 の^の冷^{ひや}こ^こは^はは^はま^まし^し月^{つき}の^の小^こ春^{はる}と^とよ^よび^びく^く麗^{うつく}し^し真^{まこと}目^め中^{なか}

一端^{ひとへん}居^いして^てる^るた^たの^の緑^{ろく}の^の目^め向^{むか}も^もあ^あら^らく^く小^こ心^{こころ}を^をれ^れて^て
 翠^{すい}の^のま^まし^しで^で志^{こころ}を^をあ^あぐ^ぐり^りあ^あり^りま^ま何^{なに}お^おひ^ひん
 雀^{すずめ}の^のあ^あり^りの^の木^き履^りを^を横^{よこ}さ^さり^りて^て二^{ふた}足^{あし}三^{さん}足^{あし}と^とあ^あら^ら
 かる^{かる}こ^こあ^あら^らこ^こと^とう^うち^ちえ^えか^かま^まへ^へ隣^{となり}ま^まる^る家^{いえ}の^の飼^{かひ}お^おけ^ける^る
 鶏^{とり}へ^へ雛^{ひな}さ^さえ^え入^いり^りつ^つね^ねて^て中^{なか}ま^まり^りし^した^た雛^{ひな}雄^{おとこ}づ^づま^ま虫^{むし}を^を
 食^たべ^べて^て居^いる^るは^はく^くぐ^ぐと^とあ^あら^らて^て涙^{なみだ}と^とあ^あら^らじ^じつ^つを^を
 此^{こゝろ}身^みも^もと^と因^よ果^{ぐわ}る^るの^のへ^へ亦^{また}と^とあ^あら^らま^まの^の雛^{ひな}で^でさ^さえ^えア^ア
 ち^ちの^の青^{あお}ひ^ひた^たる^るね^ねの^の妹^{いもうと}脊^せの^の多^た可^う老^らは^はま^まの^の雛^{ひな}

江集後中

ついでに接ぐをいふのやうに。うまうらうそれよ
 めく恋しむとさくお方へ名も志もどけをどくま
 ろつことと暗かき矢とひらとやう。雲をつつむとや
 ひたさ人の通り。あまうとしのひたあひ。ごぞ明らめ
 とささんや。かえんのきとあててと。ゆを公とあて
 も増えたとてさくひやまだ死ぬも死あれぬ月の
 因果。アまなもさくまのちごもさる時流と独り
 らうの物ちひひ。一足測り二足と庭の隅多茶山

花と一枝やいと伸あがまど枝高々を折がく。漸
 やく小なとさく伸て上る枝とみづうとせ幾失と
 かに残る枝へ翠が小髪を兵とあやうて元
 の所へを録める。このと元翠が排居り。狼小
 珊瑚の玉をつける。平生う秘藏の替を引け
 らまてくマとしひまふ小果うと飛で垣根とし。隣
 アの庭へかちまてさる得翠の狼根つ。いひかへ
 せんと討喋とありのおとさく歌く。そのと元彼金

次第へ人の瓦影のまろまろ。窓うちぞり詠めて
 ねむ。見りとおちる物あつよぞ其の緊とへ
 ちまねども。若もとねるともよむを庭下於さる履
 あつぞ。強出して其知此知と探せが果して枯草
 の中へおちり白浪よ珊瑚の玉をつける簪かの
 人あつて誰人う。かる頭挿をさすくまや。是ぞ戒不
 月下老翁の媒。まよりのまろえと心もをる拾ひ
 たり。よしくえふ不替の二のたよ唐草の毛彫と

へつらふさふあつて。翠とらる文字を崩して。或詩
 もつらふ彫るまろ。いよくとまぞ彼人の秘藏の
 ちまよ小疑ひあし。アラ舞やとむりよ。押載れて
 懐よし。さては彼人よ迎りへ。およりのと生垣の
 破目さかしてさう覗く。折る此方も替の。往か何
 方と破目よう。のぞうんとして息をあかせ。谷と心
 かり不俊巡。さもたつてあまら替の。末秘
 ころめのと遺りまろと亦なちよう。内あつて人よ同



てこんむやと。秋の草葉の霜がまて。柘子よりの木
虫の音より由細き声出して。お隣のおかこ
さる。無族でいごぶりまが。花と一枝折ふといして
イ舞を枝ふけ。貴君のやうに飛ま。ま。美由
そまう。小ごぶりませうあう。ごまを拾ひむし
て。坊へ。あまをさく下さう。ト。いまをて。夫と合
ひ舞が。垣のまき目と井げく。さ。狂たう。合へあ
るごまよ。美しの舞。あちて居ま。と。誰もまへ

まへ。あひが。ごうしてあふ。落ちてあう。そまに。ま
かえざう。仲く。ららの女。見子供が。差てある。品でま
今不測ると拾ひさう。吾儕が。おく。居ま。すけねど
今いよ。通りの立流る。替垣根ご。ふ。ご。と。言
るま。う。ても。まい。そ。ま。と。穴。う。出。て。あ。あ。げ。う。ま。わ。し
いつて。吾儕。ゆ。う。独。内。と。あ。け。て。表。う。廻。つ。く。ゆ
も。あ。ま。あ。く。ら。ま。ご。う。ぐ。ま。と。う。り。あ。う。軒。腐。ふ。う。け
う。ろ。九。の。措。さ。う。は。う。と。把。り。来。り。垣。根。へ。渡

記典の中

十三

一すくくと昇りて云々いと自と云。ハツトなるり不
 孩く兩個。こまむどまむよ恋焦を送る月日
 せぬ縁。再び自と云々の。うま下さ物よせぬ
 ても取ふ一さ下弱雅どち。霎時刻もあうり多。
 金に命のえとまづめ。懐より女ヲ簪とたりよ持て
 金へそあう口への女人の今更のさうま良辰中。
 女人の秘簪の簪と拾う女一の間でも懐へ
 ておいた。實よりまふとまふとまふと。その願ひを

惚の甘。山茶花の月下老翁。モウく死でもう
 女のトシ六翠の胸のたう。どまくととて自赤く。
 女よふ此おどくぐの。病ひふようて髪とみす。
 顔のほらうの垢洗う。心うきと限るる。おど。
 隠さんやうもあうざさの垣根のり。おふまよ
 私の簪と。あまふお拾ひおたさへ願つて由
 めの僥倖ぬ。その簪よあやうて。お懐へ遠く
 へて。おをいよの女に病躰。う方のまて

あり。さうしてあつて下さりましう。少く愛とて
 くる。白の八千代の玉枝。あつて青さびし春の雨花
 ののり風情。あつて白く少くはなれ髪柳の
 りのりさびしく。心素く金次第。かき人のほん不
 気かきあつてのさ。一く上彩の気かかめと中へ存
 ません。金へそあつて實より。一く金へよくかき
 けんとうあつて。僥倖の此ちと。そちと渡して昔
 川へ来るさる気へ。とあつて。一く随分をうとと

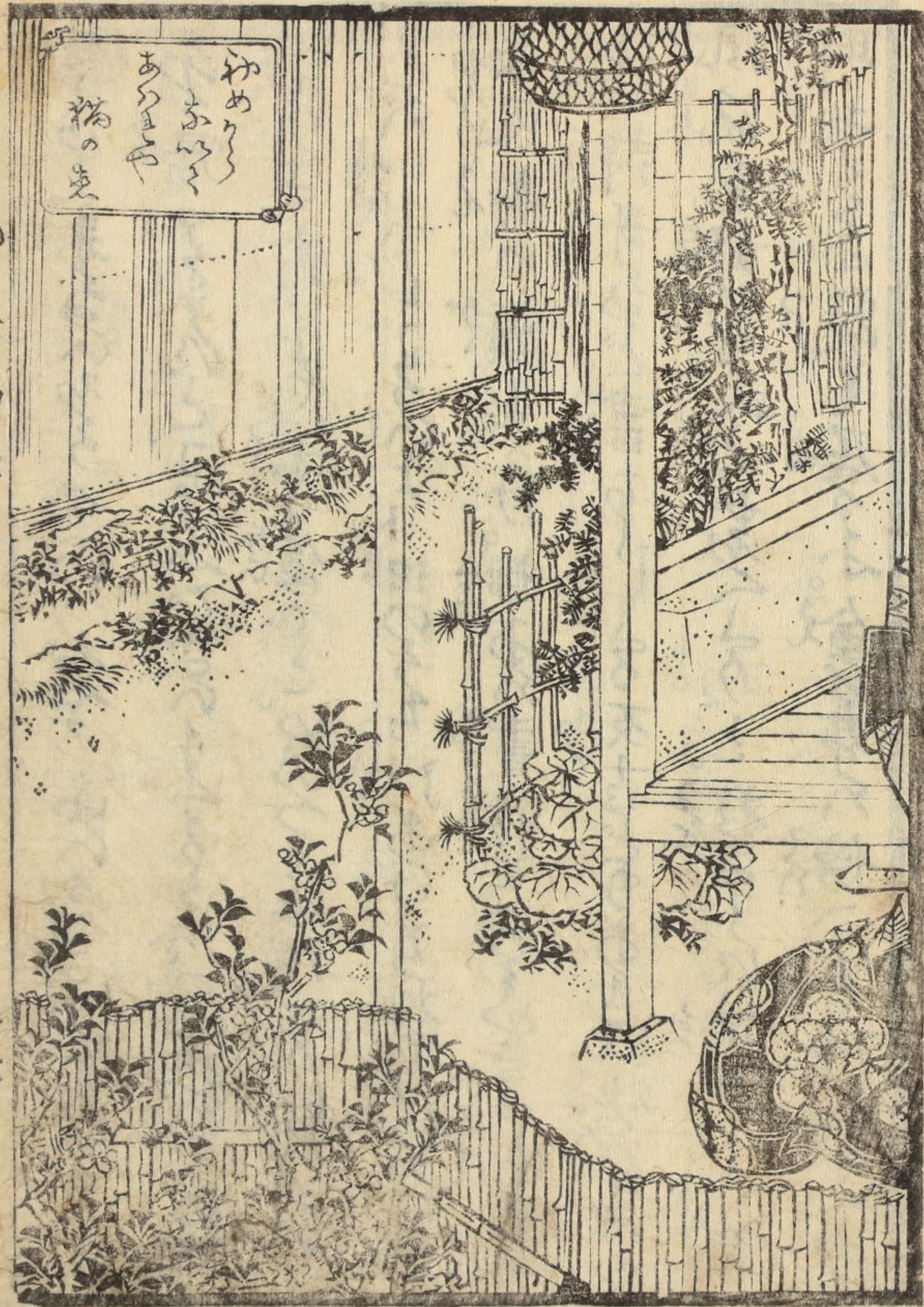
ことろであつて。つらきこのお側へゆく。度あつて。それとい
 へる。一くせんが。四強なるる病氣であつて。足も
 かしく。志まふ。う。ま。此間不。とつて。金へつま
 せ。は。で。な。め。う。立。流。小。言。て。も。こと。が。思。入。ま。す。う。あ。つ。て。
 四半分の思入ぬ。志換へ。その漸く。ま。此間。も。よ。う。
 ら。う。折。悪。く。直。ぐ。を。ま。う。も。あ。つ。て。ま。く。ち。う。と。と。今
 心。第。が。心。の。う。ち。も。か。ま。せ。る。ま。い。み。が。う。右。偏。と。う。う。下
 さ。と。亦。怖。く。さ。ふ。瓦。も。折。例。う。家。の。方。と。見。ゆ。り。ま。う。

乙 六 六

けいけいへんるる寺集つるあはれきして。夫より親類へも
 つくまるとして。益時分に出まへ。私ハ此等の子塩を
 ぐらうらうら。独苗を成して居ます。まご帰してハ来る
 まいご。せうろとおちろく集つて。苗をよ。帰して来てハすま
 ませんらう。今ハそんな今白ハおまへ。独りかうり。首尾ハ
 まことあへ。些も早く。早くト。いそいで。いそいで。女児を
 しま。あへ。ぬ。猪舟の上。まが。く。る。階の子の。いそいで。老
 うく。あへ。いそいで。四辺は。いそいで。いそいで。いそいで。其如

うへ。あへ。ら。ま。せ。ん。が。あ。つ。この。隅。ハ。物。の。完。合。ハ。マ
 そ。ま。く。そ。ん。あ。へ。ト。階。子。と。び。かり。物。實。は。其。げ。ハ
 怖。く。ま。あ。へ。と。翠。が。もの。さ。た。と。り。て。連。ら。る。様。は。た
 へ。腰。う。ち。う。け。て。あ。つ。と。息。ハ。さ。ぞ。あ。ま。び。す。ま。ま。へ
 ま。せ。ら。う。子。合。ハ。あ。を。ま。ま。へ。ん。が。貴。君。の。お。初。也。も。こ。ん。ら
 け。る。の。形。を。し。て。物。の。完。ら。う。ま。つ。この。と。合。ハ。夫。ハ。吾
 倚。も。兼。知。の。う。へ。ん。を。ま。ま。さ。げ。す。む。もの。あ。へ。も。ち
 お。あ。り。る。あ。へ。ま。ま。ま。ま。に。あ。り。ま。す。合。ハ。ま。ま。ま。ま。

江戸身衣中



巳
奥
中



巳
奥
中

位^いあつ。来る^こいぢうがく。若^わアあつ。一^いをさ^さでい
あが帰^きアアまふと。ころふとさ^さいすうろ。令^{しやう}ハそれハその時^{とき}
の^のさ。あ^あすを来る^く位^いでと。ゆ^ゆつ^つに^に残^{ざん}さう^{さう}の^の書^{しよ}が
と^とべ。ア^アこ^ころ^ろふ^ふよ^よト^トは^はの^のうち^{うち}に^にあ^あげ^げら^られ^れて^てえ^えと^とせ^せが。
朱^{しゆ}風^{ふう}軒^{けん}の^の額^{がく}を^をけ。桐^{どう}の^の書^{しよ}物^{ぶつ}を^をは^はし^しも^もる^る机^{けい}の上^{の上}
あ^あの^の詩^し丹^{たん}ま^まど^ど書^{しよ}ち^ちり^りし^しる^る反^{はん}古^こも^もあ^あら^らへ^への^の人^{にん}
風^{ふう}流^{りゅう}を^を好^{こう}める^る人^{にん}と^と若^わく^くし^しる^ると^と若^わく^くに^に懐^{くわい}く^く。雲^{うん}
時^{とき}井^いと^と不^ふ既^{けい}と^と居^いる^る不^ふ。金^{きん}を^を居^いる^る傍^{ぼう}よ^より^り令^{しやう}ハ若^わく^く久^{きう}

て^て塩^{えん}排^{はい}が^が衆^{しゆ}あ^あら^らう^うと^とえ^え。い^いつ^つに^にや^や土^ど車^{しや}の^の道^{だう}推^{おし}で^であ^あら^ら
ふ^ふか^かつ^つて^て其^{その}と^とた^たう^う。コ^コウ^ウ煩^{わん}ら^らど^ど居^いる^るの^のヨ^ヨ令^{しやう}ハそれ^{それ}の^のハ
俗^{じやく}祕^ひ久^{きう}し^しる^ると^とね^ね夫^ふに^には^はた^たく^くし^しる^るハ^ハ亦^{また}若^わく^くひ^ひを^を
せ^せひ^ひけ^けふ^ふが^が月^{げつ}手^てを^を些^さも^も忘^{わす}れる^る障^{しょう}ハ^ハあ^あく^く。と^とり^り入^いて^て宅^{たく}
さ^さえ^え知^ちれ^れぬ^ぬう^う。さ^さと^とに^に工^{こう}夫^ふして^{して}。若^わく^くの^の家^け宅^{たく}と^とせ^せむ^むし^し
夫^ふが^が此^{こゝ}知^ちの家^けさ^さり^り越^こて^て来^きて^ての^の三^{さん}月^{げつ}哉^やあ^あら^らは^はな^な
ま^まの^の内^{ない}ぞ^ぞと^との^の夢^む也^やの^の終^{つひ}は^は身^みも^もア^アん^んず^ず。令^{しやう}ハ朝^{あさ}晩^{ばん}ま^まの^の
棟^{むね}を^をり^り。初^{はつ}め^めと^と居^いる^るこ^ころ^ろを^を心^{こゝろ}ど^どぞ^ぞ推^{おし}量^{りやう}して^{して}ま^まを^を

まま下こころ公みことの真言まことごころありけり。言葉ことばのふりあふとてしるも
 殺ころらむ身み小袖こそでをめて隠かくて集あつめらひのしめ。いれんと
 志こころてもいそぐ。あく恥はにかしむとのと先さきもそと。何なんと回答こたへもあ
 ら川かみ舟ふねの篝かほり狗いぬあそののえてなる多おほた恋路こいぢの舟ふねも物
 づどのをもてす。依よき。一ひと私わたしもき。斯かにうてならし
 居ゐる心こころのうち。お察さつしるまむとて下くださるませ。いふもあど
 多おほた可愛かわいさまよ。金かね江え舟ふねの舟ふねをえて。一ひと私わたしもき。まも
 救きうありぬとてとどめてえらま。昔むかし人の真言まことごころ忘れ

ちある一生いっしょうあまんと女房にようぼう小こまきう。そらとつと居ゐるは
 一ひと私わたしもき。一ひと私わたしの嘘うそのと疑うたがひ。一ひと私わたしもき
 婿むすめのねとりの身み小袖こそではくぐらちあがめ。一ひと私わたしもき。まも
 引ひよま。一ひと私わたしもき。一ひと私わたしもき。一ひと私わたしもき。
 のり。一ひと私わたしもき。一ひと私わたしもき。一ひと私わたしもき。
 まも。一ひと私わたしもき。一ひと私わたしもき。一ひと私わたしもき。
 それに大おほた。一ひと私わたしもき。一ひと私わたしもき。一ひと私わたしもき。
 私わたしもき。一ひと私わたしもき。一ひと私わたしもき。一ひと私わたしもき。

手りみんあが帰る時分。夜更に馬を牽き下木根をたは
 ば今ささふ苗よりちかく金糸糸の跡をたふすなり。枕物
 誘ふ嵐よりちかく。花の名残もゆきのふし。雲時多
 めて居るうらうら。かくて其月ゆく方の方の雀もどれす
 わけへ独はくぐ物もあふはる。あまの遠近の霞相
 はぐる撞の音も。今宵は月もさそて月をぞしむ折る
 人の影せり。羨むとくそとて戸をあく。松の影は
 翠の夢もうげ。夢をたぬり。積ひのせ。松の影と抱は

ちあ「さうしそままたとまへと嬉しむ。あはれ
 り。翠の完事と。あまの肉は温かき。うさ。世よつと
 てゆきまう。こ男が帰ていひます。あまのさあをよめ。祝敷
 の所へ今くひの油さう。淋しむ。あまの苗守して居る事と。
 いふよとこ。言傳の。いふもあまの淋さくて。アさう
 ちあうとあひます。あまの嬉しむ。あまの目のかさるを
 候か。門口ゆして。あまの埋てあまのあまの志を。あま
 急むてまごたすと。いひ残しと。あまのあまのあまのあまの

源氏物語

二

ことふまはうらふと夫であく事のはしこ下等ておちけく
 は第一を且六とせりて僥倖の多くこちちおえりて
 あまての月の樹の間の露の夜なる濡のやすきん
 初時雨あぐましくて冬の日の庭もをくま降つり
 雪をくあくまうちとけく。かろる二人が花の眉羨し
 さの世界かりけり

錦の魚初編卷之中終

